嘉庫　嘉悦大学学術リポジトリ　Kaetsu

University Academic Repository

The Fulfilling and Creative Behavior and Manners for the Advance of the Student Behaviors

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: KOGA, Hiromi メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/149

辞儀と魅力行動
－教育現場への提言－

The Fulfilling and Creative Behavior and Manners
for the Advance of the Student Behaviors

古　閑　博　美

Hiromi KOGA

＜要　約＞

学生の授業中の私語、着帽、睡眠、携帯電話の操作、飲食、化粧、教科書・ノート・筆記具の不携帯のほか、トイレや電話のための途中退室などが問題となっている。そういった態度に接し、教師はどのように対すればよいのであろうか。教育現場で、このことに悩む教師の姿がある。

社会で礼儀・作法は不可欠であり、教育現場で、無作法な態度や傍若無人な振舞いが看過されてよいわけはないのである。大学は躾教育まで担っていない、との考えは排除したいものとなる。知識の教養と行動の教養を身につけた学生を育成するのは、社会のニーズでもある。教師は、教育現場にふさわしい辞儀と魅力行動を実践したい。授業中、飲食、私語、着帽などの学生がいても、注意もせず放置する教師を、心ある学生は評価していない。

学生が、知的教養以外にマナーなど行動の教養を身につけることは、彼らの将来にとって重要というだけでなく、わが国の将来と直結する課題となる。魅力行動学という研究分野を、あえて唱える所以である。

＜キーワード＞

辞儀、魅力行動、魅力行動学、礼儀、作法、教養、廉恥心、コミュニケーション、マナー

はじめに

学生の授業中の態度として、私語、着帽、睡眠、携帯電話の操作、飲食、化粧、教科書・ノート・筆記具の不携帯のほか、トイレや電話のための途中退室などが問題となっている。それらに対し、教師としてどのように注意すればよいのか迷う、との声がある。注意して、価値観を押し付けたと反発されたり、ことを分けて説明したにもかかわらず通じなかったりした経験がある教師もいるであろう。

親や他人に叱られた経験のない学生が増え、人前で叱られることに過剰反応する学生もいる。注意する側のことば遣いや態度に、人権配慮の視点が厳しくときには過剰なほど問われ

るようになったこと、あるいはまた殺傷事件につながるなど注意の代償があまりにも大きいとして、注意するのを躊躇する教師もいる。

そうであっても、教師は、学生を教育するうえで専門知識や教授法を問われるほか、人間教育に携わる者としての自覚と見識が求められていることを忘れてはならない。学生の幼稚な態度、社会性のなさを指摘する声が多くあがるなか、大学の教師は研究と授業さえしていればよい、といえようか。学生が、知的教養以外にマナーなど行動の教養[1)]を身につけることは、彼らの将来にとって重要である。そこで、学生の生態を取り上げ、教育現場での辞儀と魅力行動について考えてみることにしたい。

1．辞儀とは

礼儀は、個人と個人、個人と団体、団体と団体の関係を取り結ぶうえで必要不可欠である。礼儀には、「辞儀、行儀、書儀」の三つがある。辞儀は礼儀と不可分である。辞書には、礼儀は「①礼と儀。②人の行うべき礼の道」、辞儀は「①頭をさげて礼をすること。あいさつ。また、そのことば。おじぎ。②遠慮。辞退」とある（『広辞苑』第五版）。

「礼儀」の、「礼（禮）」と「儀」の字義をみると、「礼（禮）」は「社会の秩序を保ち、人間相互の交際を成立させるために、人の守るべき道」、「儀」は「①すがた。かたち。外見やようす。立派なようす」である（『広説佛教語大辞典』）。「礼」の定義に、「人間社会における文化的法則」（加藤常賢）がある。「儀」は、その偏と旁から、人の正しいおこないまたその様子を表す文字といえる。

そうしてみれば、「礼儀」は、人間社会における文化的法則を正しくおこなうことまたその敬意表現の作法のことで、そこに、敬う心、敬し合う心が問われているといえよう。古来、礼儀・作法は社会に不可欠なものとして、古今東西、礼儀を無視したり軽んじたりする国や民族はないのである。

「辞」は、「ことば。言辞・事がら」を意味する。普通、「お辞儀」といえば、頭を下げ屈体する動作を思い浮かべる人がほとんどであろう。「辞儀」はことばをともなったあいさつの作法のことで、身体動作だけでは辞儀とはいえない。そこに、正しいことば遣いが必要とされる。「辞を低くする」といえば、丁重なことば遣いをすることである。

「言葉遣いが明晰で正しい人は、それだけでも人柄が上品に見える。そして作法とは人間を品よくする術（クンスト）だとすれば、正しい言葉遣いを学ぶのが作法の始めということになる。」（中野 1997）というように、ことば遣いと人柄の関係はさまざまに言及されてきた。古代ローマの教育家クインティリアーヌスは、「子供の乳母たちは欠陥のある話し方をする人であってはならないということである。（中略）出来ることならば知恵のすぐれた女性であることを望み、せめて事情の許す限り、最良の女性を選びたいといったのである。彼女たちに要求される第一の原則はほとんど疑う余地なく品性であるが、なお同時に正しく話す人でなけれ

ばならない」[2] といっている。初期教育の重要性はいうまでもなく教育は一貫して取り組むものであることから、大学でも、クインティリアーヌスのことばを借りれば、「大学人は欠陥のある話し方をする人であってはならないということである。出来ることならば知恵のすぐれた人であることを望み、せめて事情の許す限り、最良の人を選びたいといったのである。大学人たちに要求される第一の原則はほとんど疑う余地なく品性であるが、なお同時に正しく話す人でなければならない」といえよう。

儀式においてのみならず礼儀・作法は日常的に求められている。礼儀・作法を身につけることで、対人関係を構築したり調整したりする能力が向上し、ひいては自分に自信がつく。私たちは、場に応じてどのように行動するしないの判断を下しながら生活している。辞儀はコミュニケーションの第一の手がかりとなる行動であり、適切に実行したいものとなる。正しく話すうえで、きちんとしたあいさつができることがその導入となるであろう。あいさつができないと社会人として未熟とみなされ、国際社会では日本人の恥となる。

2．魅力行動とは

私は、魅力行動を研究し、身の回り30センチメートルからはじめる行動実践を提唱している[3]。魅力行動は、「質、量、形、意味において魅力が付与された行動」[4] のことで、そこに礼儀・作法と廉恥心を強調している。そのため、魅力行動は、①志がある、②よき精神が宿っている、ことが前提の魅力ある行動とし、理にかなった美しい行動のしかたと心の働きを重視する。魅力行動は、個人だけでなく組織、団体が備えたい行動であり、また国や民族の資源として捉えたい行動となる。

わが国は、20世紀半ば以降、驚異的な経済復興と発展を遂げる一方、「衣食足りて礼節を知る」姿が薄れ、今やそれが目に余る。「若者の歩きながら食べる行動について」の調査で（古閑 1996）、1970年代以降、わが国の中流家庭の力（家族の結束力や、子どもを一人前に教育する力など）が一気に殺がれていったといえる姿が浮かんだ。路上、車両内、駅の構内で座り込む若者たち、ところかまわず食べながら歩く人たちの姿は、行動の美学が薄れ行くわが国の現状を示す以外のなにものでもない。バブルに浮かれた1980年代以降、そういった状況は加速度的に増えたといっても過言ではない。

魅力行動は、他に対し魅力的でありたいという意志に基づく行動で、他におもねったり、人を不快にさせたり、人からあなどられたりするような行動からは最も遠いものである。振舞いがチープ[5] だと顰蹙を買うのは昔も今も変わらない。問題は、チープな言動がそうとは思われずに社会に蔓延し、それに人びとが慣れてしまうこと、そして定着してしまうことである。

若き日の私のお粗末な出来事を話すことにする。外国のリゾート地のことである。ホテルの屋外のレストランの奥まったところで椅子に腰掛けていた私は、辺りに人がいないのを幸

い、別の椅子を引き寄せ、その上に足をのせてくつろいでいた。すると、後ろのほうで、ヨーロッパ人のマネージャーが、ボーイに、「あちらのレディに椅子から足を下ろすよう注意申し上げるように。丁寧に。(Ask her putting her legs down from the chair. Politely.)」と指示しているのが聞こえた。指示されたボーイは、「はい」と答えてこちらに向かってきた。そうはいっても、客に注意するのである。何と呼びかけようかと思案しながら歩いていることが伝わってきた。

私は、彼らの会話を背中で聞きながら、なんともいえぬ恥ずかしさに襲われていた。そのとき、母の、「はしたない」と嘆く姿が浮かんだ。私は、ボーイが来る前にそ知らぬ顔をして椅子から足をおろした。ボーイは、黙ってそばを通り過ぎて行った。「旅の恥はかき捨て」というが、このことは、心の箍がゆるんでいた姿として、それ以後、いましめとしている。若気の至りといったが、今でも自分の言動を振り返り反省するのに事欠かない。だが、そんなときでも、自分に廉恥心を呼び起こすことができれば、たいていのことは解決されていく。そこに、手本となって浮かぶことばや教え、姿かたちを知っていることが自分の力となる。

1970年代初期、東京の一流ホテルのコーヒーショップやレストランの入口には、「ジーンズ・下駄履きの方はお断り致します」という掲示が出ていた。これには、注意が必要なくらい服装の乱れが目につくようになった、TPOを無視した服装がはびこりそれに眉をひそめる客からの苦情が店側に多く寄せられた、などがあげられる。それ以外に、店の見識もあったであろう。今ではそんな看板や掲示を目にすることもなく、どこでもたいていの服装が許容されている。だが、そのことが、場の雰囲気を損ねたり顰蹙を買ったりするのを忘れてよいとはいえない。人の行動は社会の影響を免れないのであり、現代は、子どもからおとなまで安易な行動に流される風潮が否めない。

今日、大学に「サービス」の視点が導入され、「学生サービス」の概念が浸透しつつある。「学生サービス」とは、学生に、快適な空間、有意義な時間、情報などを提供することを指していうものである。大学がおこなうサービスに対し学生が満足するならば、それは、大学への評価を高めるといえる。少子化で、多くの大学は学生の確保に四苦八苦し、またどうすれば学生の評価を得られるか頭を悩ましている。だが、それは、彼らにとって不快なこと面倒なことはしないし、注意しもしないということにはならない。学生の無作法に関していうならば、それを放置したり無視したりする態度を取らないことこそが、学生へのサービスの質を高めることになるのではあるまいか。

教師の考え、授業の運営の仕方は人それぞれ異なるとはいえ、キャンパスでの魅力行動の目的は教師と学生が互いに信頼関係をはぐくみ、学習の成果を高めることにある。教育現場は社会の文化的法則が存在し機能する場でなければならないにもかかわらず、実際にはそういった意識と行動が共有されない現状があり、それに対するディレンマがある。私は、教育的見地から、無作法な学生に対し教師は毅然とした態度で臨むべき、と考えるひとりである。

かつて、「お客様は神様です」(三波春夫)ということばが流行したが、それは、神(大

切な存在）とも位置づける客の満足を得ようと芸の修行を積んだ人のことばではなかったのか。そこには、「芸能は人びとに奉仕するもの」との考えがあった。大学や大学人は、教育や学問をとおして社会に奉仕する、という観点から学生サービスの質の向上に努めたい。魅力行動を身につけた学生が闊歩するキャンパスを創造するのはそのひとつである。

とはいえ、コミュニケーション能力が未熟（学生だけに限定できない）だと意志の疎通がうまくいかなかったりして、気まずい関係が生じたりすることになる。また、社会性の未発達といえる学生がいないではなく、理解能力が低くキレやすい学生が反抗的態度を取るなどした場合、授業運営に支障をきたすことは明白である。無作法な学生にいかに対処すべきか、教師も悩んでいる。

3．ある教師の悩み

学生の授業中の態度は、嘉悦大学内の研究会等でテーマとして取り上げられる一方、常勤非常勤にかかわらず教師たちの間で問題となっている。つぎは、教室での着帽について述べた拙稿（「室内での着帽姿から思うこと」2005）[6] に寄せられた、ある教師の声である。

> （授業中の）飲食の禁止や脱帽は当然だと思っていたが、いささか悩んでもいる。ある男子から、「円形脱毛症になってしまった。帽子をかぶって授業に出ることをご許可ください」といわれ、その者には脱帽は促さないことにした。ある留学生から、「なぜ水を飲んではいけないのか。咽が渇いたら水分補給は当然のこと。それを拘束するとはアメリカなどでは人権の拘束にあたる。また、先生方でもペットボトルなどを置き、飲みながら講義する先生もいる。先生がよくて学生がだめとはおかしい」といわれ、「今はお茶の時間ではない。咽が渇いてしようがないなら仕方ないが、ペットボトルなどは机に置かず下に置くように」と指示した。喫茶を許可するか悩んでいる（教師にも、茶を飲みながら、あるいは着帽姿で講義する人がいる。研究会等で食べながら出席する姿も見る）。喫茶と着帽についてどう対処しているか、非常勤の講師陣でもしばしば話題にあがっている。先生によって対応が違うようだが。考えを聞きたい。
>
> （2004年11月6日付。メールによる）

今やどこでも室内での着帽姿が目につく。大学でも、各クラスに1、2人は必ずいる。注意するしないは教師による。円形脱毛症など身体的事由があればそれはまた別の話である。正装（普段の大学生活には不要）以外、私は、必ず注意し脱帽するよう促している。指示に従い脱帽した学生には、「ありがとう」という。普通はこれで済む。なぜ教室で着帽を不許可とするか、について説明することもある。それらは、室内では頭を保護する必要がないこと、服装のマナーがあること、礼を失すること、などである。試験中であれば、カンニング

の疑いを生じる、ということもある。注意に素直に従う学生もいればしぶしぶ従う学生もいる。無視する学生もいないではない。それでも、一回は必ず注意する。

人は見かけではない、というが、多くは見た目の印象に左右されている。表現の自由は守られるべきである。だが、情報社会の今日、同時に、氾濫する情報のなかから無節操な表現を識別し、そういった情報に安易に染まらない良識を備えた学生を育成することが肝要となる。大学は学問の府であり躾教育まで担う必要はない、との意見もあるが、全人教育の場であることを忘れてはならない。

米国での体験として、講演や講義中の飲食は普通のことであった、との報告を読んだが[7]、そのような光景がわが国で増えていることに心ある人びとは眉をひそめているのではなかろうか。わが国の文化風土からみて、講演中や授業中に受講生が飲食する姿が安易に容認されるとは思わないが、実際には増えている。米国に限らないが、外国で普通のこと、ということがなんの意味を持つというのであろうか。外国の事例を学ぶさいはよいものに学ぶべきであって、わが国の文化的行動遺産を崩壊させるような行動を安易に導入したり許容したりすることは避けたい事柄となる。すでに一部は崩壊している、といって見て見ぬ振りをするのもしてはならないことである。よき国民を育成する視点に立って、教師は、学生の無作法な場面に遭遇したさい、ここではこうするこうしたほうがいい、と具体的に話したり指導したりする努力を放棄してはならないのではあるまいか。

授業中、私語をはじめ授業に無関係なことをしている学生を放置する教師の姿は、そうでない他の学生の目にどのように映るであろうか。嘉悦大学で実施する学生授業評価アンケートの自由記述欄には、そういった教師に対するコメントとして、「自信のない態度」「やる気のない態度」「無視する態度」「統制が取れない態度」などがある。それは、教師を厳しく批判するものといえる。

このほか、授業運営に支障をきたすとはいえないが、学生の無作法な態度に、机に突っ伏して寝入る、というものがある。彼らに対し、教師の多くは消極的態度を取っているのではなかろうか。いうなれば、彼らを、起こしてまで授業に参加させようとはしない態度（判断）である。それには、注意することで授業が中断するのを嫌ったり、彼らは寝ているだけで授業の妨害をするわけではないと考えたりすることのほか、学生が寝るのは興味を引く授業をしていないからだ、と非難されたくないなどの理由があげられる。また、注意するのはエネルギーを使うことであり、授業という目的以外に自分の力を使いたくないとの気持ちもあるであろう。また、教室の規模や受講生の数にもよるであろう。

近年、大学院を含む最高学府で、学生の行動能力や、社会性が欠落したかのような態度が問題となっているが、学生の言動の幼稚さやマナーの未熟さの例は枚挙に遑がない。今年のゼミ合宿でのことだが、筆記具を持参していないという学生がいたので注意すると、「栞に書いてなかった」と反論された。小中高と、学校からの「お知らせ」[8]に慣れている（慣らされている）のであろうが、筆記具の携帯は大学生の常識、と思う想像力さえないのかと唖

然とした。わが国の教育は、子どものときから手を差し伸べすぎているのではないだろうか。おとなになっても、電車のアナウンスに聞くように、「待て」「座るな」「譲れ」と注意されてばかりである。このことについては、別の機会にゆずりたい。

4．あいさつに関する調査結果から

学生を対象にあいさつに関する調査[9]をおこなった結果、「あいさつは不必要」と答えた学生は3%だったが、「大事でない」と答えたものはいなかった。回答者の半数があいさつをよくし、半数がときどきし、「まったくしない」はいない。あいさつする人を「評価する」が87%、「評価しない」が14%、「何も感じない」が5%、であった。あいさつしないことをどう思うか、との質問には、場合によるも含め「失礼と思う」が86%、「なんとも思わない」が6%、であった。調査の結果、ほとんどの学生はあいさつが大事と認識し、あいさつする人を評価している。だが、そこには日常で見聞きする態度との乖離がある。本当に、彼らは辞儀を身につけているのであろうか、という疑問である。

朝起きてから夜寝るまで、一日にはいろいろなあいさつことばがある。食事の前後には、「いただきます」「ごちそうさま（でした）」という。買い物や食事に行くと、「（ようこそ）いらっしゃいませ」「ありがとうございます」「またお越しください」などと声を掛けられる。こういったあいさつことばは、これまで教えるまでもない当たり前のことばと考えられていたものである。昔から、ことばは挙措に連動するものと考えられ、家庭でも心して遣うよう教育された。あいさつができる、ということが成長の証であった。だが、今日、家族の生活形態が多様化し、個食であったり外歩きしながら飲食したりして、「いただきます」「ごちそうさま」がいえない子どもたちや、夜勤明けでもないのに朝から「お疲れさま」とあいさつする学生が増えている。

調査では、1日のなかで多く使うあいさつことばとして、1位「おはようございます」72%、2位「こんにちは」40%、3位「ありがとうございます」27%、という結果であった。ちなみに、「お疲れさま」は4位21%であった。アルバイトをしている学生が多いことから、これらのことばは接客用語として使われている可能性がある。「おはようございます」のあいさつは、「①朝（午前中）、人にあった時の挨拶の言葉、②芸能・放送の世界で、夜昼問わず、その日はじめて会ったときの挨拶の言葉」（『新明解国語辞典（第五版）』）とあるうちの、②の意味で使用している場合が少なくない。

それは、「アルバイトをしている方にお聞きします。アルバイト先に着いた（入った）とき、どんなあいさつをしていますか？」に対し、「時間に関係なく、『おはようございます』という」が70%、であったことからいえる。続いて、「時間に関係なく、『おつかれさま』という」4%、「時間に関係なく、『こんにちは』という」3%、の順であった。「『おはようございます』の用法は不安定になってゆく可能性がある、ということが予想できる」[10]ということを裏付

ける結果となった。「おはようございます」は、漢字で「お早うございます」と書き、「早」には「朝早い」(『新明解漢和辞典』第二版）の意味があるが、多くの学生がそのことを気にすることなく使うようになっている。午後、学内で会う学生からも、「おはようございます」と声をかけられることが増えている。

2001年、嘉悦女子短期大学は嘉悦大学となり男女共学のキャンパスとなった。すると、男子学生に朝から、「お疲れさま」と声を掛けられることが増えた。その後、いろいろな場面で注意してみると、このことばが一日中、男子学生に限らず多用されているのに気づいた。

昨年のことだが、ある企業で研修を担当したさい、冒頭、「みなさん、お疲れさまです。きょうは、お忙しいなか、お集まりいただきありがとうございます」というあいさつがあった。本来、ねぎらいのことばである「お疲れさま」が、いつでもどこでもあいさつ代わりに使われるのには違和感を覚える。「疲れ」は「疲労」や「弱ること」で、「疲れる」は「体や精神の力が弱る」「くたびれる」という意味がある（『広辞苑』第五版)。そんな意味を持つことばを朝のあいさつや、会議などのはじまりに使われると、かえってやる気が失せる。少なくとも、私はそうである。

どんな場合でも一言で済むことばがあると便利だが、遣い方によってはことばの文化がやせ細ることにもなりかねない。ことばは、民族の文化、品位、精神、心の働きの奥深さなどを伝える手段であり、魂の通い合いさえをも創造することができる。辞儀は、人・団体同士の交流のきっかけとなることばをともなった作法であり、おろそかにできないのである。その辞儀が教育の場で乱れているのは由々しきこととなる。

夕食時、塾通いの子どもたちが電車内や駅のホームで歩きながら飲食している姿を見かけるが、彼らが、食する前に「いただきます」というのは見たことがない。食べ終わって、「ごちそうさま」ということもない。そもそも、そんな食事のしかたでよいのであろうか。レストランであっても、注文の品が運ばれ何もいわずに食べ始める姿は、単に胃袋を満たすだけの行為に映る。

「自分で金を払っているのになぜ店に『いただきます』といわなければならないのか」という若者がいたが、食や食することができることに対して感謝を表す「いただきます」の奥深さがわかっていない。そんなことをいえば自分の品性を減じて見せることになるとは考えもしないのであろう。「いただきます」は食前のことば以外に、「(品物を）もらう」「(何かを）～してもらう」「食う・飲む」の謙譲語として知っておきたいことばである。「いただく」は、目に見えるものや、目の前にあるものだけを対象にしているのでなく目に見えないものも含む。食後の「ごちそうさま（です・でした)」は、ふるまいやもてなしに対する感謝、御礼のことばである。我が家では、これをいわないと食べ終わっても食卓を離れることはできなかった。

あいさつのことばや動作はことばの専門家でも迷うことが多いようである。あいさつのことばについて、時間とことばとの関係をNHK日本語センターに問い合わせたところ、

NHKの新人アナウンサー研修にそういったマニュアルはないとのことであった。一方、放送に関する調査研究として、「おはようございます」は10時ごろまで、「こんばんは」は午後6時ごろから、という結果[11]がある。国内に時差はないが、日本列島は南北に長く、多様な生活が営まれている。当然のことながら、地域や環境、人の立場、年齢により語差（語感差）が出る。そうであれば、「おはようございます」はいつまでか、「こんばんは」はいつからかなど、案外難しいこととなる。ことばは、気まぐれな風のようでもある。自分のことばが相手にどのように響きどこにどう流れていくかわからないことがあったり、誤用であっても多くの人が遣うことでそれがそのまま定着したりすることがある。「おはようございます」が一日中使われたり、「お疲れさま」があいさつ代わりに使用されたりするのもそのひとつかもしれない。

時代の変化とともに生活の仕方やことば遣いが変化し、あいさつの用法に揺れが見られるなか、「時処位」に合ったあいさつを身につけるのは簡単ではない。しかしながら、調査ではほとんどの学生があいさつの重要性を理解していることがわかった。つぎは、適切な辞儀と魅力行動が課題である。キャンパスで、適切なあいさつを継続的におこなうことが、ひいては彼らの対人コミュニケーション能力を高めることになる。それには、教師の意識と取り組みが問われる。

5．キャンパスでの辞儀と魅力行動

屋内外のどこでも抵抗なく座り込む若者が増えているが、教室も例外ではない。それは、もはや普通の光景として許容すべきなのであろうか。いや、私はそうは思わない。2004年の秋学期のことだが、ある授業の初回に教室の定員を上回る学生が来て机と椅子が足りなくなった。教室の後ろに立っていた学生たちの3分の2は、3分もしない間に床に座り込んだ。注意すると、びっくりしたように立ち上がったのが印象的であった。彼らに対し、「忍耐力がない」「礼儀知らず」「体力がない」などと非難するのは簡単だが、これまで誰も注意したことがないのではなかろうか、と、そのことのほうが問題に思えた。

必要な知識と行動の教養を身につけた学生を輩出することは、社会の要請であり大学の使命である。大学の評価は偏差値のみで決まるものでもない。あの大学の学生、卒業生はマナーがなっていないなどという評判が立つのは大学にとってマイナスである。マナーに欠ける学生は就職活動にも支障が出ており、学生のマナーの向上は大学が真剣に取り組む課題となっている。マナーという魅力行動を身につけることにより職業能力の向上が期待される。学生のマナーおよび社会の一員としての意識の欠如に危機感を抱く大学は、カリキュラムに「マナー講座」「キャリア講座」などを開設する対策を講じている。そういった講座は学生の人気が高い[12]と報じられている。

しかし、マナー講座を開講すればことが足りるわけではない。また、受講したからといっ

て、すぐにマナーが身につき適切に発揮できるようになるとはいえない。一般に、大学の教師は、「彼らは大学生なのだから」といって学生の自主性に期待しがちだが、それだけでは解決も改善もできないことがある。全学的取り組みが必要である。良好な学習環境は、教師と学生双方が暗黙の了解を含め、それを、自明のこととして協力し合う態度なくしては成立しない。そうした心得は魅力行動能力となる。

今日、学生の態度不良の理由は単純とはいえず、教育現場で対処に苦慮することが少なくない。大学や、教師は、教育の場では学生の無作法を見逃さない、という明確な意思表示をすべきである。注意や指導はあくまで教育的観点に立っておこない、学生への愛を前提とした魅力行動が本来的といえる。

結びに代えて

幼稚園から大学院まであらゆる教育現場で子どもたちや学生の問題行動が取り沙汰されている。それは、わが国の教育のあり方を問うものとして看過できない。大学は、学生に学問の教養以外に行動の教養を身につけて社会に送り出す責任があり、そのための具体的な方策を考え実行しなければならない。

一方、行動の教養を身につける、というと、大学は躾教育までは任としていない、との反論がある。だが、学生の生態を観察すればわかることだが、授業に集中せず私語や飲食、携帯の操作など無作法な態度が目に余る。近年、多くの大学が、学生の、品性に欠ける態度や社会性のなさに対し真剣に取り組む姿勢を打ち出すようになってきたのはこうした状況を踏まえてのことである。そこには、自主性や社会性が欠如した学生が増えているのに気づいても、それは学生自身の問題である、として放置してきたことへの反省がある。

師弟という関係認識が薄れている、というより「師弟」ということばさえ知らない学生がほとんどであり、教師と学生の人間関係は様変わりしている。そんななか、教育現場の現状に、学生の将来ひいてはわが国の将来に危機感を抱く教師がいる。

授業中の着帽、私語、飲食等にどのように対処すればよいか教師が迷う姿、それこそが、これまでのわが国の教育に対する問題提起にほかならないであろう。学生の授業中の無作法に対し教師個人の取り組みは無論のこと、教育現場全体として、辞儀が励行され魅力行動が実践される環境の創造を目指したい。授業中、飲食、私語、着帽などの学生がいても、授業に差し障りがない、注意するのが面倒などといって放置したり無視したりする教師を心ある学生は評価していない。

社会性を身につけた良識ある学生の育成は、わが国の将来と直結する重要な課題である。魅力行動学という研究分野を、あえて唱える所以である。

注

1)「マナーとは、言わば“行動の教養”のことで、そしてマナーの根源は礼法にあるのです。」(小笠原清信『礼法入門　―しきたりと作法―』カラーブックス、昭和53年、2ページ)から、知識の教養に対し、礼儀・作法、マナー全般を「行動の教養」として用いる。

2) クインティリアーヌス／小林博英訳(1981年)『弁論家の教育1』明治図書、22ページ。

3) 1990年、嘉悦女子短期大学(現嘉悦大学短期大学部)で「魅力行動学ゼミナール」を開講。「魅力行動学」は、「さまざまな出会いをとおして魅力的な自己形成と人間関係を求める行動の学」のこと(古閑博美(1996年)『魅力行動学入門』学文社、14ページ)。魅力工学(R)研究も視野に入れている。

4) 古閑博美(2001年)「儀礼文化への一考察　―魅力行動の観点から―」『儀礼文化』第29号、儀礼文化学会。

5) 個人や団体の、言動に重みや信頼を欠く態度のこと。

6) 古閑博美(2005年)「室内での着帽姿から思うこと」『魅力行動学通信』第41号、魅力行動学研究所、平成16年10月28日

7) 藤井正男(2003年)「視点仏教にみる、儀礼文化の阻害要因」『儀礼文化』第32号、儀礼文化学会、5ページ。

8) 学校や担任などからの文書によるお知らせ。「栞」や「学級通信」などもこれに入る。

9)「若者の意識調査　あいさつについて」。2005年6月16日～6月27日に実施。女子短大生104人の回答を得た。少数点以下切捨て。集計に、古閑ゼミゼミ生工藤明菜さんの協力を得た。

10) 塩田雄大(2002年)『「よろしかったでしょうか」はよろしくないか　～平成13年度(後半)ことばのゆれ全国調査から(1)～』『放送研究と調査　放送用語保存版227』70ページ。

11) 前掲書。65ページ～69ページ。

12)「面倒見のいい大学連載第12回法政大学」『Asahi Shimbun Weekly AERA 2005. 8. 29』48ページ。

参考・引用文献(文中以外)

中村元(2001年)『広説佛教語大辞典』東京書籍
中野孝次(1997年)『現代人の作法』岩波書店